

二〇〇六年九月三十日（土）、日本福祉大学名古屋キャンパスにおいて「大学院で学んだこと」というテーマで、第二十七回東海高等教育研究所職員フォーラムが開催されました。本稿は、名古屋学院大学の前川勉氏（名古屋大学大学院教育発達科学研究科高度専門職業人養成コース前期課程修了）と、東海学院大学の内田穂穂氏（桜美林大学通信制修士課程大学アドミニストレーション専攻二年生）のお二方に、フォーラムでお話いただいた内容に加筆修正していただいたものです。  
\*在籍年次はフォーラム開催時のものです。

## 大学職員が 大学院で学ぶ意義

前川 勉

まえがわ・つとむ

名古屋学院大学・総務部  
一九七〇年、三重県生まれ

### ■ 入学動機

大学院への進学動機

はじめに入学動機についてですが、一言で言えば、大学を取り巻く状況、いわゆる高等教育の状況について学びたいと思っ

たからです。名古屋大学大学院高等教育マネジメントの同期生五名も、基本は同じような動機だったようです。ただ、学んだ後どうするのか？実務に役立たせたいとか、実務を行うベースとなるものを学びたいとか、そういうところで違ってくると思います。ちなみに、私は実務を行うベースとなるものを学びたいと考えていました。

もう一つのきっかけは、大学院進学の一、二年前、日本私立大学連盟（以下、私大連）主催の研修に参加したことです。十名程度でのグループワークが中心であり、そこで、他大学職員のモチベーションの高さに刺激を受けました。それは、例えば、東京の大学職員の人達は、大学の垣根を越えて勉強会をやっているとか、またこの私大連研修にも自主的に応募している等です。私よりも年下の方が大半でしたが、当時の私にはとても考えられないぐらい意欲的

刺激を受けました。

## 進学先の選定

以上の理由等から、体系的に長いスタンスで高等教育について学びたいという希望を持ち始め、大学院への進学を考えました。

高等教育について学べる大学院を調べてみると、幾つかありました。名古屋大学は、そのうちの一つですし、広島大学もそうです。私立大学では、桜美林大学にも設置されています。私が進学を考えていた翌年度から桜美林大学に通信制課程ができることになりました。それらの大学院のうち、仕事をしながら学べるところを選択すると名古屋大学と桜美林大学の通信制の二つしかないわけです。

次に、その二大学のプログラムについて調べてみました。まず、名古屋大学を修了した人に会い、履修状況を中心に質問をしました。その方は一週間に大体四日ぐらい、六限目を中心に履修していました。私の所属大学は郊外にありますので、六時十五分からの六限目を履修しようとするのが早退しないと間に合いません。週に三日も四日も早退をお願いするのは無理だとあきらめかけていました。そうした中、十月ぐらいに名古屋大学大学院の説明会に参加しました。そこで、現役院生の方（大学職員の方）と話す機会があり、考え方が変わりました。その方は私と同じように郊

外から通っておりましたが、「週に一、二回と夏休みの集中講義を履修していれば十分単位は取れますよ」と言われました。それを聞いて、もしかしたら通えるかもしれないと思いはじめました。

次に桜美林大学について調査しました。十一月頃、翌年度開設予定の桜美林大学大学院通信制の説明会に東京まで出掛けました。しかし、そこでの説明を聞き「通信制課程は、自分をきちんとマネジメントできる人でないと継続していくことは難しい。私には合わない。やっつけていけない」と考え、結果、名古屋大学への進学を決意しました。

こうして私が受験を決意した名古屋大学大学院の正式名称は、名古屋大学大学院教育発達科学研究科博士課程（前期課程）教育学専攻の中にある生涯学習研究コースの高等教育マネジメント分野です。桜美林大学のように専攻ではなく、専攻の中のコースにある一分野であり、定員は若干名となっており、桜美林大学と比較し小規模です。

ここでは、どのような人材の育成を目的としているかという点、要綱には『高等教育マネジメント』では、高等教育に関連する職業人・社会人を対象に、理論的・実践的専門教育を行い、高度な専門性を身につけた高等教育のプロフェッショナル（大学職員・教員、行政官、その他の高等

教育関連の職業人)の育成を目的としています」と書かれています。院生の顔触れを見ると、大学職員だけではありません。韓国のいわゆる教育委員会のようなところから派遣された方や高校教員の方、高等教育関連の企業の方も在籍していました。

### 選考方法

次に、選考についてですが、出願資格は、「大学卒業またはそれと同等以上の学力を持つ社会人で三年以上の職業経験や社会的活動を持つ方」です。募集人員は、先述したとおり若干名であり、試験科目は書類選考と外国語、口述試験です。

書類は、いわゆる入学志願票等の一般的なものの他、社会人院生の場合は「職務及び社会活動説明書」、「研究・学修計画」と「これまでの研究テーマとその成果の概要」です。この三つの書類作成には多くの時間を費やしました。当初は、書き方すらも分からず、参考図書を購入しました。「研究・学修計画」の内容は、当時私は人事課に所属していましたので、「大学職員の育成」というテーマにしました。それから、「これまでの研究テーマとその成果の概要」は、出願前に参加した私大連研修で、グループワークや他大学視察の後に書いた最終レポート(テーマは「大学職員の育成」)をまとめました。

外国語については、英語を選択しました。長文のみ十分の試験です。一応、過去問を生協で購入し、対策をとりました。最後に口述試験については、提出書類の「研究・学修計画」と「これまでの研究テーマとその成果の概要」を中心に行われました。

### ■ 大学院での学修・研究

カリキュラムと 続いて、大学院での学修・研究状況について述べたいと思います。

#### 履修状況

まず、名古屋大学の特徴を挙げてみます。

一点目は、ゼミ実施が私の所属している教育発達科学研究科教員のものだけではなく、高等教育研究センターの教員によるゼミもあることだと思います。教育発達科学研究科のゼミは一般院生もいますので非常にアカデミックです。桜美林大学には、実務家教員や著名な教員が多いと感じましたが、名古屋大学の場合、実務家教員はいません。

一方、高等教育研究センターでは、どちらかというと戦略的なことをやっていますので、研究科とセンターにゼミがあることで、アカデミックなものとは戦略的なものとバランスのとれたゼミが開講されているということになります。

二点目は、名大にある資源の活用です。中央図書館や研

究科の図書室には豊富な資料がありますので、資料の収集には困りません。それから、高等教育研究センターなど各種センターが設置されていること、さらに、生協では多くの専門書を扱っています。

最後に教員と院生のバランスです。私の同期生は五名でしたが、年代よっては一名のときもありました。ゼミ担当教員は、教育発達科学研究科に八名、高等教育研究センターに三名いますので非常に少人数なゼミが展開され、教員と院生との濃密な人間関係を構築することができます。

また非常勤についての在り方が私立大学とは異なっています。通常、私立大学では、人件費の問題で非常勤教員を雇用しますが、国立大学では、著名な方に夏季休暇等を利用し、非常勤として来ていただきます。ちなみに、二〇〇四年度は丸山文裕先生、二〇〇五年度には田中敬文先生が担当されました。

それから、時間割は朝の限目から七限目まで配置されています。ただ、私のような社会人の場合、日中の受講は不可能ですので、六限目の六時十五分から七時四十五分、七限目の八時から九時三十分、それに加えて夏季休暇の集中講義を中心に受講しました。ちなみに、七限目はあまり開講されていません。

次にM1、M2での履修状況について概観します。

まず、M1の前期ですが、木曜、金曜に四コマ集中的に履修しました。木曜は、六限に高等教育政策論（戦後の高等教育政策史）、七限目に高等教育マネジメント講義です。

これは高等教育のイントロ的な講義です。そして、金曜六限は高等教育政策論（初年次教育マネジメント）。七限目に高等教育基礎論Ⅲ（入学者選抜）を履修しました。

M1の後期は、なるべく早退する日を減らそうとしたので、月曜・火曜・木曜に履修しました。月曜七限に高等教育経営論（戦略的計画）、火曜六限に高等教育経営論（組織とリーダーシップ）、七限に高等教育基礎論Ⅱ（大学における技術・知的財産移転のマネジメント）、木曜七限に高等教育経営論（今後の大学経営）です。

集中講義では、高等教育政策論（日本の高等教育財政）。これは先述しました丸山先生のゼミです。さらに、名大のカリキュラムにはコア科目がありませんが、他分野の科目を最低一つ以上履修することとなっていますので、初等教育関連の科目、教育経営学Ⅴを履修しました。それから、研究調査指導Ⅰ。これは指導教員のゼミで、時間割上組み込まれず、不定期です。後から詳しく説明します。

図1では、先述したM1の履修状況を一覽で示していま

図1 M1の履修状況

曜日	期間	(6限)	(7限)
月	前期	—	—
	後期	—	高等教育経営論 (戦略的計画) *
火	前期	—	—
	後期	高等教育経営論 (組織とリーダーシップ) *	高等教育基礎論Ⅱ (大学における技術・知的財産移転のマネジメント)
水	前期	—	—
	後期	—	—
木	前期	高等教育政策論 (戦後の高等教育政策史)	高等教育マネジメント講義
	後期	—	高等教育経営論 (今後の大学経営)
金	前期	高等教育政策論 (初年次教育マネジメント) *	高等教育基礎理論Ⅲ (入学者選抜)
	後期	—	—
集中		高等教育政策論 (日本の高等教育財政) / 教育経営Ⅴ / 研究調査指導Ⅰ	

※その他開講科目：高等教育基礎論Ⅰ (大学の理念と歴史)、高等教育財政論 (大学経営と財政)、比較高等教育論Ⅱなど

図2 M2の履修状況

曜日	期間	(6限)	(7限)
月	前期	—	—
	後期	—	—
火	前期	—	—
	後期	高等教育基礎論Ⅰ (大学と学問の歴史)	—
水	前期	—	高等教育内容論 (授業設計) *
	後期	—	—
木	前期	—	高等教育マネジメント講義
	後期	—	—
金	前期	—	—
	後期	—	—
集中		高等教育マネジメント (中国フィールド・スタディ) / 研究調査指導Ⅱ・Ⅲ	

※その他開講科目：高等教育基礎論Ⅱ (アメリカ大学の理念と歴史)、高等教育内容論 (学士課程教育論)、高等教育経営論 (大学における学生のキャリア形成支援) など

す。そのうち\*のついた科目は、高等教育研究センター教員によるゼミです。

その他、高等教育関連開講科目は、高等教育基礎論Ⅰ(大学の理念と歴史)、高等教育財政論(大学経営と財政)、比較高等教育論Ⅱなどです。

続いてM2の履修状況です(図2参照)。M1である程度単位が取得できており、さらに、修士論文執筆がありますので、履修科目数をかなり減らしました。前期では、水曜七限に高等教育内容論(授業設計)、木曜七限に高等教育マネジメント講義を履修しました。これはM1のときに履修しましたが、指導教員の科目ですので再履修しております。

それから、後期は一科目だけ火曜六限に高等教育基礎論Ⅰ(大学と学問の歴史)を履修しました。

加えて集中講義として、高等教育マネジメント(中国フールド・スタデイ)を履修しました。これは、中国の北京大学、清華大学、北京師範大学の名門大学への視察です。あと、指導教員との研究調査指導ⅡとⅢにおいて、修士論文の指導してもらいました。

M2に開講された主な科目を挙げてみますと、高等教育基礎論Ⅱ(アメリカ大学の理念と歴史)、高等教育内容論(学士課程教育論)、高等教育経営論(大学における学生のキャ

リア形成支援)などです。

以上、科目のサブタイトルを見ると、例えば入学者選抜など実践的な名称も多々ありますが、高等教育研究センター以外の科目は非常にアカデミックです。また、ゼミの実施形態については、この後で説明します。

### ゼミについて

まず、高等教育マネジメント分野の院生構成は、大学職員として、部長の方、課長の方など、多様な職位の方がいます。そして、二十歳代から六十歳代まで、年齢も非常に幅広く、国公私立等所属も多様です。

教育発達科学研究科で行われるゼミは一名から多くて八名ぐらいの規模です。内容は、諸文献、資料等の分担報告、討論です。高等教育研究センターでのゼミは、主にレクチャー↓作業↓発表の流れで進められます。

ゼミでの報告担当時は、文献資料を収集し、コメント・論点を含んだレジュメを作成します。これは、土日を使って準備しました。報告のないときは、文献を読んでおきます。そして、ゼミ生は、高等教育の社会人院生ばかりでなく、ドクターの方や一般の院生も履修しています。評価については、期末試験があるわけではなく、ゼミ内での日々の報告発表、討論への参加で評価されます。期末レポート

のある科目もあります。

### 修士論文について

次に、修士論文の執筆について触れます。名大の場合は、学位に対して「二年以上在学し、所定の授業科目を履修し三十単位以上を取得し、かつ修士論文の審査・試験に合格すれば、修士の学位が授与されます」と規定されていますので、修士論文は必須です。

先ほど調査研究指導Ⅰ、Ⅱ、Ⅲとして、指導教員のゼミがあると述べましたがこれがいわゆる修論指導にあたります。ただ、指導教員が手取り足取り何かレールを敷いてくれるわけではありません。いい意味で旧帝大時代の指導方法だと思います。

修論を執筆する上での二年間のスケジュールですが、まず、M1の四月に、研究題目及び二年間の研究計画を立案した「大学院研究指導・学修計画」を提出します。当然、入試時の研究・学修計画とリンクしています。

M1のときは、同じ指導教員で、同じような研究テーマを持つている院生とゼミを行いました。指導教員一人と私達院生で文献レビューを行い、また参加したセミナーの内容紹介をし、それに対して、指導教員からコメントをもらいました。これらの活動により、思考が活発化し、頭の整

理ができ、研究テーマの絞り込みが可能となりました。さらに、文献に関する意見交換も行いますので、文献収集にも役立ちました。これらは、不定期ですが、月に一回ぐらい実施しました。

M1の後期には、課題意識検討会がありました。高等教育マネジメントの院生五名が一年間修了した段階での研究状況を報告します。ここでは、教員やOB、OGの方からコメントをもらいました。

M2になると、早速四月に修士学位論文題目届を提出しますが、まだ仮題の段階です。

私の場合、五月からメイン素材の決定と他文献の読み込みをしていきました。同時に、九州大学で開催された日本高等教育学会第二十七回大会に参加しました。その参加により、内容だけではなく、アカデミックな報告の仕方やレジュメの作成方法など非常に勉強になりました。

八月には広島大学の高等教育研究開発センターの公開セミナーに参加しました。こちらは日本で初めての高等教育に関するセンターであり、所属教員の多さ、さらに非常に充実した資料室が印象に残っています。セミナー後は、広島大学で職員論がご専門の大場先生による名古屋大学と広島大学との合同ゼミがありました。広大の場合、現役社会

人の院生は在籍していません、元大学職員、元企業勤務の方々ですので一般院生と同じように昼間から講義を受け、修論準備、研究ができます。当然ながら、名大から参加した二名よりは修論作成の進度が早いので、少し焦りを感じました。

九月には、中国の名門大学へ視察に行きました。修論執筆中であり、この時期の参加に迷いましたが、北京大学、清華大学、北京師範大学という名門大学を視察できるのは二度とないチャンスと考え、参加を決めました。

中国の大学視察から帰国後、修論のアウトラインに関して指導教員にゼミをしてもらい、修正に修正を重ねてアウトラインを固めました。

十一月には、四月に提出した修論の題目に関する変更届を提出しました。これが最終的な確定です。ここまでいきつちりとしたものに詰めていかないといけません。私は主題を「日本における大学アドミニストレーター育成に関する一考察」に変更し、提出しました。その後も修論執筆を継続していきますが、働きながらですので、日常はなかなか書けません。毎日一時間ぐらいでは非常に効率が悪くて、細切れになってしまいますので、土曜日や日曜日、時間がとれるときに集中的に書きました。その間も指導教員と連

絡をとり、何度かゼミをしてもらいながら、修正していきます。年末年始の休暇中は、一番時間が取れ集中できる期間でしたので、ほとんど一日中執筆していました。

年明けからは、書けた章ごとに指導教員にメールを送り、指導してもらいました。メールほど便利なものはありません。そして、一月十日に無事、教育学部教務学生掛へ提出することができました。

その後、二月に口述試験があります。内容は、四十分間、主査と二名の副査による口述試験です。それから、紀要に載せる抄録の作成があり、三月二十七日には無事修了式となり、修士の学位が授与されました。

修論執筆に関するコメントとしては、執筆開始時期が一般院生と比較し非常に遅かったので、M2の八月頃は一年後の提出にしようとも考えましたが、指導教員から「自分の経験から見ても、一年間延長しても延ばしただけのものが書ける人はなかなかいない。今年、一気に書いてください。頑張ってください」と励まされ、一気に書くという気持ちになりました。

このように、執筆開始は遅かったのですが、強みとしては、いわゆる素材、メイン文献を早期に決定していたこと、および広大との合同ゼミにより一般院生との違いを認識で



きたこと（現場を知っていること）だと思えます。逆に、社会人院生の弱みとしては、やはり仕事と家庭と院生のバランスをとることが難しいことでした。

## ■ 修了後の状況

最後に、修了後の状況です。意識の変化として、大学院に行く前は実務的なことにしか興味がなかったのですが、理論の重要性を認識でき、思考に深みが出たと思います。例えば、高等教育の歴史や政策など、実務に直接的な関わりはないかもしれませんが、高等教育機関に勤めている者として、そのベースを知るといこうかこうした知識を持っている人はいなければいけないと思います。理論と実践のバランス、よく理論の上に実践があるといわれますが、そういったものは必要だと実感しました。もう一点、アカデミックなネットワークが構築できました。職位、年齢を越えた院生同士や名大、他大学の教員とのネットワークです。これは何物にも変えがたい財産です。

最後に課題としては、大学院で学んだことをどうやって生かしていくかということだと思います。それぞれの立場・職位によって違ってきますし、所属大学の大学院への派遣に関する考え方によっても異なるでしょうが、これはな

かなか答えの見つからない課題のように思います。皆さんも大学院での学修に限らず、セミナーなどに参加されることがあると思いますが、それをどれだけ実務に生かしているか、コメントがあれば聞かせていただきたいと思えます。

M2の時、慶応義塾大学へインタビュー訪問し、自大学職員を自大学院またはアメリカの大学院へ派遣していることを知りました。制度として構築しているためバックアップ体制も充実しており、大学院での二年間は業務を免除し、給与は一〇〇%支給、大学院学費も何割かは補助しているようです。ちなみに以前は、全額補助だったようです。このように恵まれた環境で制度として派遣しているにもかかわらず、修了後の活かし方が課題だそうです。本人の問題もあるのですが、職場での配置の仕方、使い方にも問題があるようです。適材適所の配置と言われるかもしれませんが、やはり組織でやっている以上、適材適所に都合よく配置できるわけではないので、なかなか難しい課題です。われわれ、修了した側としては、修了してすぐにそれを生かせる状況に就ければ幸いです。たとえそうでなくても、その時までには磨いておくのが大切だと思っております。例えば、研究会で発表するのもいいですし、いろいろな学会に入るのも一つの方法かもしれません。